

資料5 高齢者社会におけるICT普及のモデルの検討（委員提出意見）

パソコンや携帯電話のような主体的な操作や情報発信を得意とする ICT 製品については、今後、我が国の高齢者の間でどのように普及していくのか、大変興味深いところである。ここでは、本調査研究の過程で話題として上がった社会学的な理論を踏まえ、高齢者の ICT 利活用のモデルとの関係について触れる。これらのモデルの適用可能性については、今後さらなる調査研究が必要と考えられる。

（1） 高齢者を取り巻く”環境”を変化させる（エンゲストロームの活動理論）

エンゲストロームは、「主体」の学習活動を促す源泉は内的矛盾によるもので、その矛盾を解消するために、「道具」を変えていくという理論を提唱している。これは、拡張による学習とも言われる。基本的なモデルを図 1に示す。

「主体」はさまざまな関係性の中で動いているため、「主体」を動かすには「道具」を変えて「効果」をもたらすだけでは効果がなく、規則、共同体、分業といった要素についても考えていかなければならないという解釈が出来る。すなわち、主体を「高齢者」、道具を「パソコン」と考えた場合、この両者だけで変化を促すのではなく、その他の要素も同時に変えていくように働きかける必要がある、ということになる。

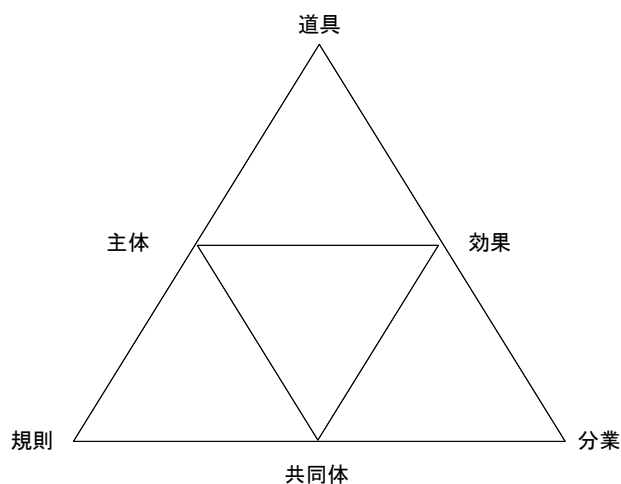


図 1 エンゲストロームの活動理論の基本フレーム

（出所：<http://lchc.ucsd.edu/MCA/Paper/Engestrom/expanding/ch2.htm>をもとに三菱総合研究所作成）

この考え方を踏まえ、今回のモニター調査結果についてモデルで整理したものが図 2である。パソコンの利活用に成功し、うまく生活に取り入れている高齢者は、パソコンを購入し道具として使えるようになると生活に変化をもたらす（図中①か

ら②の流れ)、さらにこれに留まらず、シニアネットという共同体への参加をきっかけに(③)、高齢者のネット上のしきたりを学んだり(④)、仲間をサポートしたりサポートを受けたりしてスキルと活動の幅を広げていく(⑤)という主体を取り巻く全体が着実に変化していることが明らかとなった。

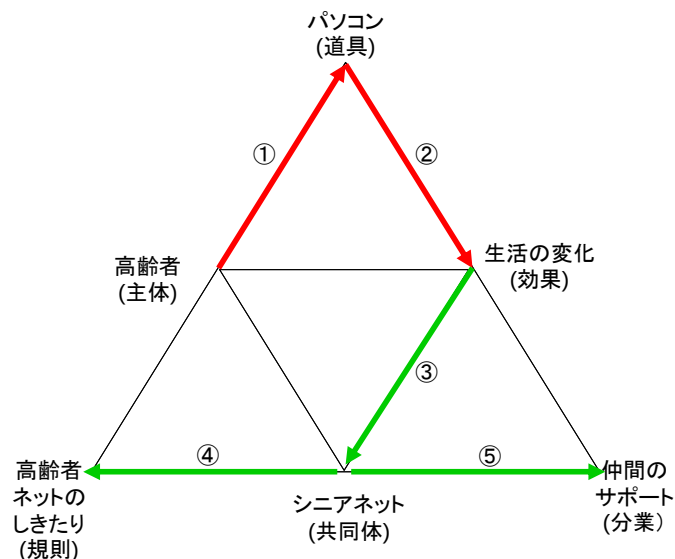


図 2 活動理論を用いたモニター調査結果の整理例

(出所：三菱総合研究所作成)

このようなモデルに基づいた考え方が、高齢者の ICT 利活用にも適用できるとすれば、利用意向が低位なユーザ層に対して、活動理論の「共同体」や「規則」から「主体」を変えていくという考え方の適用にもつながる可能性がある。

(2) ネット社会独特の人と人とのつながり（スモールワールドネットワーク理論）

ネットワーク上のつながりは、対面・地域によるつながりを超えたダイナミックなものとなる。パソコンを利活用することによって、地域を超えた人との出会い、遠く離れた家族との定期的なやり取り、あらゆる人とのインターネット上での意見交換が可能となる。旧来の人的ネットワークとは異なるネットワークを形成することとなり、その広がりの可能性も際限がない。ソーシャルネットワークサービスはこの典型例と言える。モニター調査においても、地域を越えた交流の機会が多くはない地方部においては、パソコンによる新たな出会いが生活上の刺激となっている例が見られた。

このときのつながりというのは、誰もが誰もと等しくつながっているというのではなく、日常的に強くつながっている特定のグループがありつつ、そのメンバーの一人が持っている別のグループとつながりを通じて他のグループとも交流

する、といった関係性であると言われている。このイメージを図 3に示す。

ネットワーク社会に参加した高齢者がどのように自身のネットワークを構築・変化させていったのか、このモデルに基づいて検討することで、地域における ICT 利活用促進の具体的な方策の参考になると考えられる。

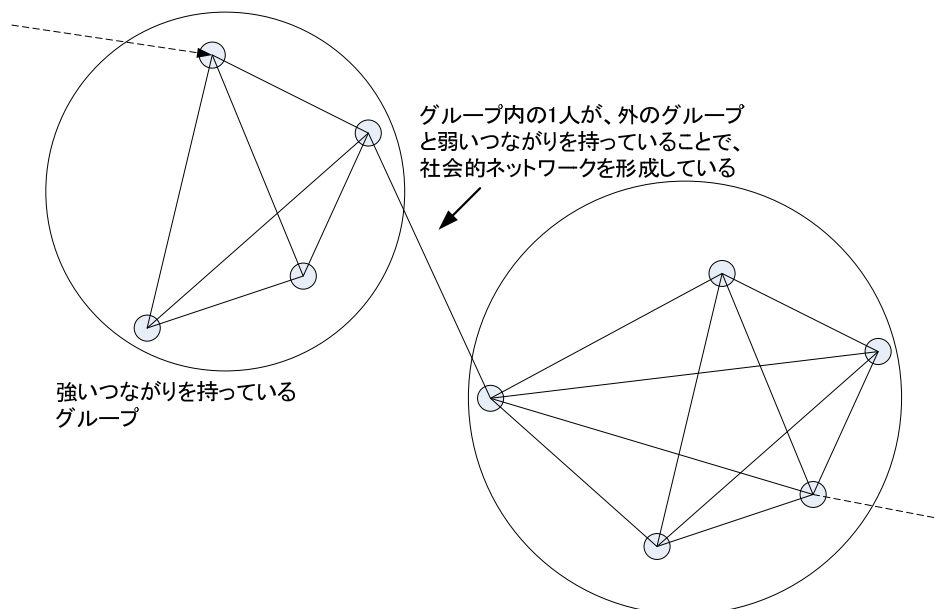


図 3 高齢者におけるスモールワールドネットワークのイメージ

(出所：「スモールワールドーネットワークの構造とダイナミクス」、ダンカン ワッツ (著)、栗原ら訳 (2006) などをもとに三菱総合研究所作成)